

〔研究ノート〕

いわゆる「柄鏡形住居址」について

郷 田 良 一

i. はじめに

縄文時代中期末から後期にかけて、関東地方を中心として出入口構造（張出部）が明瞭にわかる住居址が分布している。最近ではこうした住居址に対し、住居本体を「柄鏡」の鏡に、張出部を柄に喩えて「柄鏡形住居址」と言う呼び方が一般化している。柄鏡形住居址の発見は古く、大正15年の東京大学人類学教室による千葉県市川市姥山貝塚の発掘調査にまで遡ることができる。また、柄鏡形の平面形態を主流とする敷石住居址の発見も古く、多数の類例が知られている。

ところで、最近になってこうした柄鏡形住居址は、その出現と展開が、中期末から後期へかけての変動期と深く関わっているという認識が高まる中で、にわかには注目されはじめた。また、南関東を中心として資料の増加が著しく、各地域における在り方が明らかになりつつあることも、柄鏡形住居址に対する研究の活発化を促すことに大きく貢献している。

さらに、従来その存在が希薄であるとされていた千葉県においても資料の増加は著しく、中

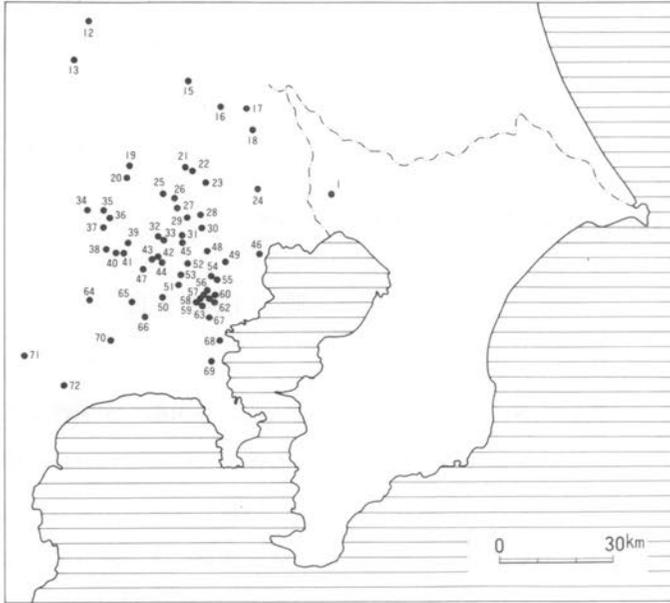
*桜井清彦「縄文時代中期の集落跡——横浜市洋光台猿田遺跡——」『考古学ジャーナル7』昭42(文献1)、の写真説明において「柄鏡形の住居跡」と述べている。また、写真解説では「柄鏡状のもの」と述べている。これが柄鏡形住居址という呼称を用いた最初である。

**宮坂光次・八幡一郎「下総姥山貝塚発掘調査予報」『人類学雑誌42-1』昭2(文献2)、4号住居址について「東南方には二条の溝外方に開きて、出入口を形成せるが如き状を呈す」と平面図と共に報告されている。

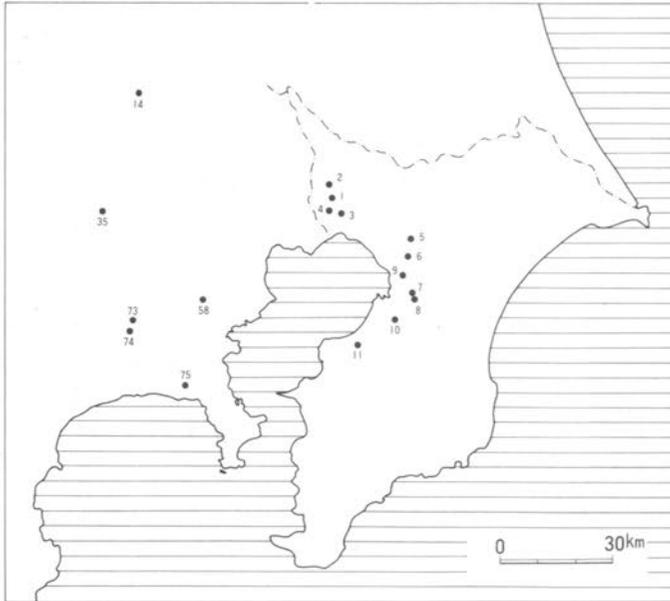
***柴田常恵「高ヶ坂の石器時代住居址」『史蹟名勝天然記念物1-1』大15(文献3)
後藤守一「高ヶ坂発見石器時代聚落遺跡」『東京府史蹟名勝天然記念物調査報告書4』大15(文献4)
同「南多摩郡南村高ヶ坂に於ける石器時代集落遺跡」『東京府史蹟名勝天然記念物調査報告書5』昭15(文献5)

***村田文夫「柄鏡形住居址考」『古代文化27』昭50(文献6)
同「縄文時代集落址研究の動向」『考古学ジャーナル130』昭51(文献7)
同「続・柄鏡形住居址考」『考古学ジャーナル170』昭54(文献8)
山本暉久「敷石住居出現のもつ意味(上)・(下)」『古代文化28』昭51(文献9)
同「縄文時代中期終末期の集落」『神奈川考古9』昭55(文献10)

研究ノート



[中期末]



[後期前半]

千葉県 (表9の番号と同じ)

- 1 松戸市・金桶台遺跡
- 2 松戸市・貝の花貝塚
- 3 市川市・姥山貝塚
- 4 市川市・曾谷貝塚
- 5 四街道市・千代田IV区遺跡
- 6 千葉市・加賀利貝塚東斜面遺跡
- 7 千葉市・木戸作貝塚
- 8 千葉市・小金沢貝塚
- 9 千葉市・矢作貝塚
- 10 市原市・砥園原貝塚
- 11 袖ヶ浦町・伊丹山遺跡

埼玉県

- 12 深谷市・出口遺跡
- 13 大里郡・露梨子遺跡
- 14 東松山市・岩の上遺跡
- 15 北本市・上平遺跡
- 16 北本立郡・志久遺跡
- 17 北本市・真慈寺東遺跡
- 18 岩槻市・黒谷田端前遺跡
- 19 狭山市・宮地遺跡
- 20 入間市・板東山B遺跡
- 21 富士見市・開沢第2遺跡
- 22 富士見市・北通第2遺跡
- 23 朝霞市・泉水山遺跡
- 24 川口市・ト伝遺跡
- 25 所沢市・東の上遺跡

東京都

- 26 東村山市・南秋津遺跡
- 27 東久留米市・新山遺跡
- 28 練馬区・青山遺跡
- 29 田代市・自由学園遺跡
- 30 武蔵野市・御殿山遺跡
- 31 小金井市・はげうえ遺跡
- 32 国立市・谷保東方遺跡
- 33 国立市・南慶寺裏遺跡
- 34 西多摩郡・新井遺跡
- 35 秋川市・羽ヶ田遺跡
- 36 秋川市・二宮神社遺跡
- 37 秋川市・西秋留遺跡
- 38 八王子市・船田遺跡
- 39 八王子市・西中野遺跡
- 40 八王子市・町田第II遺跡
- 41 八王子市・山王谷遺跡
- 42 多摩市・多摩ニュータウンNo.57遺跡
- 43 多摩市・多摩ニュータウンNo.67遺跡
- 44 多摩市・多摩ニュータウンNo.27遺跡
- 45 小金井市・前原遺跡
- 46 港区・伊豆子貝塚
- 47 町田市・大久保台遺跡
- 48 調布市・上布田遺跡
- 49 世田谷区・大蔵遺跡
- 50 町田市・八幡平遺跡
- 51 町田市・平和台No.1遺跡

神奈川県

- 52 川崎市・西管第3遺跡
- 53 川崎市・仲町遺跡
- 54 川崎市・初山遺跡
- 55 川崎市・大野遺跡
- 56 横浜市・磯野土遺跡
- 57 横浜市・荏田第5遺跡
- 58 横浜市・荏田第2遺跡
- 59 横浜市・荏田第17遺跡
- 60 横浜市・藤田第16遺跡
- 61 横浜市・藤田第6遺跡
- 62 横浜市・新羽第9遺跡
- 63 横浜市・二の丸遺跡
- 64 津久井郡・寺の原遺跡
- 65 相模原市・当麻No.3遺跡
- 66 相模原市・藤坂D遺跡
- 67 横浜市・菅田・羽沢農専地区遺跡
- 68 横浜市・清水ヶ丘遺跡
- 69 横浜市・津光台猿田遺跡
- 70 伊勢原市・下北原遺跡
- 71 津久井郡・尾崎遺跡
- 72 足柄上郡・金子台遺跡
- 73 藤沢市・西富貝塚
- 74 伊勢原市・三の宮遺跡
- 75 鎌倉市・東正院遺跡

図35 南関東における柄鏡形住居址分布図

期末から後期前半に時期を限定しても、管見に触れただけで11遺跡27例^{*}にのぼっている（表11）。ところが、資料が増加するに従って、埼玉、東京、神奈川など、西部地域における柄鏡形住居址とは、出現・盛行に時期差があると共に、その形態・構造等にも相違のあることが明らかとなってきた。そこで本稿では、千葉県における柄鏡形住居址の在り方について、西部地域との比較検討を中心に行うと共に、両地域における柄鏡形住居址にみられる出現・盛行時期の差、形態・構造等の相違がどのような背景によって生じたのか中期末（加曾利EⅢ式期以降）から後期前半（堀之内式期）までを中心に若干の検討を加えてみたい。

なお、本稿では明瞭に出入口構造を造り出すことによって生じた柄鏡形という平面形態に焦点をあてて論を進めていきたい。従って柄鏡形を主流とする敷石住居址も本稿の扱う範囲に含めている。このように柄鏡形という平面形態を重視するのは次のような理由による。即ち、どの時代、どの地域の住居であれ、外界との通路にあたる出入口は不可欠である。しかし、出入口構造を住居本体から大きく突出させ、その痕跡を明瞭に残すような住居構造は、柄鏡形住居址出現以前にはみられないものである。また、張出部の先端あるいは住居本体との結合部に埋篋を埋設する例が多く認められるという住居の在り方は、比較的限定された時期と地域に知られているのみである。柄鏡形住居址が長い縄文時代の中にあつて、中期末から後期への一つの変動期と認識される時期に出現・盛行したのは、この変動期こそ、柄鏡形という住居構造を生み出した背景であつたことをうかがわせる。それはまた、柄鏡形住居址の出現・盛行時期、その形態・構造等を地域的に検討することにより、中期末から後期への変動期を具体的に解明するための一資料となり得ることを示している。以上のような理由によって、柄鏡形という平面形態そのものに注目したい。

ii. 柄鏡形住居址の時期と分布

柄鏡形住居址の初源形態をいつ、どこに求めるかについては研究者によって意見が別れているが、盛行期を中期末（加曾利EⅢ式期以降）とし、分布の中心を南関東西部地域とみる点ではほぼ一致している^{**}。初源形態の問題は後に述べるとして、まず盛行期における形態・構造等を概観してみると、おおよそ次のような特徴を指摘することができる^{***}。

(1) 住居本体は円形を基調とし、前時期に比べてやや小形化している。

* 米田耕之助「縄文時代後期における住居形態の一様相」『伊知波良3』昭55（文献11）、が指摘するように、張出部は斜面下方に向けて造り出されることが多いため、住居本体に比べて保存状態が不良なものが多い。従って、柄鏡形住居址であるか否かの判断に苦しむ例も多い。ここでは柄鏡形住居址の可能性のあるものも含めた。

** 文献6～10参照。

*** 文献6、9、10に拠る。

表11 千葉県における柄鏡形住居址(中期末~後期前半)一覧表

番号	遺跡名・遺構番号	規模 m		住居形態の分類	施設	時期	備考	文献
		住居本体 (長径×短径)	張出部 (長さ×幅)					
1-①	松戸市・金楠台遺跡・第1号住居址	5.1 × 4.3	—	—	埋襲(張出部結合部?)	称名寺		(12)
-②	松戸市・金楠台遺跡・第2住居址	3.8 × 3.8	2.2 × 0.4	Ⅳ		加曾利EⅣ	石棒破片出土	"
2	松戸市・貝の花貝塚・24号住居址	5.0 × 4.6	—	—	埋襲(張出部結合部?)	称名寺		(22)
3	市川市・姥山貝塚・第4号住居址	4.5 × 4.5	(2.0)×(2.5)	(Ⅲ)		(堀之内)		(2)
4-①	市川市・曾谷貝塚・E3号住居址	3.5 × 3.2	(1.0)×(1.5)	(Ⅲ)	張出部結合部、張出部先端に大形ビット	称名寺		(16)
-②	市川市・曾谷貝塚・M2号住居址	4.5 × 4.5	—	—		堀之内Ⅰ		(29)
5	四街道市・千代田Ⅳ区遺跡・3号住居址	5.5 × 5.2	—	—	埋襲(張出部結合部付近?)	称名寺		(23)
6	千葉市・加曾利貝塚東傾斜面遺跡・J-D-18住居跡	7.4 × 6.1	(3.2)×(3.4)	(Ⅲ)	張出部に大形ビット	堀之内Ⅰ		(17)
7-①	千葉市・木戸作貝塚・28号址	(5.5)×(5.0)	(1.0)×(2.7)	(Ⅲ)	埋襲(住居本体東壁寄り)張出部先端に大形ビット	堀之内Ⅰ	} 重複関係にあり	(18)
-②	千葉市・木戸作貝塚・29号址	(4.5)×(4.2)	(0.9)×(1.8)	(Ⅲ)		堀之内Ⅰ		"
-③	千葉市・木戸作貝塚・30号址	(6.0)×(5.2)	(1.1)×(2.6)	(Ⅲ)		堀之内Ⅰ		"
-④	千葉市・木戸作貝塚・33号址	(5.5)×(4.8)	—	—		堀之内Ⅰ		"
8-①	千葉市・小金沢貝塚・3号址	(5.7)×5.5	—	—		堀之内Ⅰ	炉址3か所、壁溝あり	(19)
-②	千葉市・小金沢貝塚・4号址	5.7 × 5.4	2.5 × 3.0	Ⅲ	埋襲(住居本体東壁寄り)張出部先端に大形ビット	堀之内Ⅰ	壁に沿ってベット状の高まり、炉址3か所	"
-③	千葉市・小金沢貝塚・6号址	4.5 × 4.5	1.1 × 2.2	Ⅲ		堀之内Ⅰ	炉址2か所	"
-④	千葉市・小金沢貝塚・9号址	6.0 × 5.0	2.2 × 3.4	Ⅳ	張出部に大形ビット	堀之内Ⅰ	壁に沿ってベット状の高まり	"
-⑤	千葉市・小金沢貝塚・10号址	(7.0)×(6.6)	(2.8)×(2.2)	(Ⅲ)	張出部に大形ビット	堀之内Ⅰ	炉址4か所	"
-⑥	千葉市・小金沢貝塚・13号址	6.5 × 6.5	2.8 × 3.1	Ⅲ		(堀之内Ⅰ)	壁溝あり	"
9-①	千葉市・矢作貝塚・011住居址	(4.8)×(4.6)	—	—		堀之内Ⅰ		(30)
-②	千葉市・矢作貝塚・012住居址	(5.0)×(4.5)	—	—		堀之内Ⅰ		"
-③	千葉市・矢作貝塚・013住居址	6.3 × (5.3)	—	—		堀之内Ⅱ	同心円状に拡張	"
10-①	市原市・紙園原貝塚・第33号住居址	(6.0)×(6.0)	(1.8)×(3.0)	(Ⅲ)	張出部に大形ビット	堀之内		(11)
-②	市原市・紙園原貝塚・第38号住居址	7.4 × 6.2	(3.4)×(6.0)	(Ⅲ)	張出部に大形ビット	堀之内		"
-③	市原市・紙園原貝塚・第44号住居址	(5.4)×(5.4)	(2.4)×(3.0)	(Ⅲ)	張出部に大形ビット	堀之内		"
-④	市原市・紙園原貝塚・第46号住居址	(5.0)×(4.4)	(2.0)×(2.4)	(Ⅲ)	張出部に大形ビット	堀之内		"
-⑤	市原市・紙園原貝塚・第58号住居址	(4.4)×(4.2)	(2.0)× —	—		称名寺		"
11	袖ヶ浦町・伊丹山遺跡・006号址	(5.4)×(4.5)	—	—	埋襲(住居本体北壁寄り)	称名寺		(24)

●規模、住居形態の分類、時期の()は推定を示す。

●住居形態の分類は文献6の分類基準に従った。

- (2) 柱穴は、ほとんど例外なく壁柱穴となる。
- (3) 張出部はいわゆる長柄型が主体を占める。^{*}
- (4) 山岳丘陵地帯では部分あるいは全面に敷石を施す例が多い。
- (5) 張出部先端及び張出部と住居本体の結合部に埋甕が埋設される例が多い（どちらか一方の場合もある）。

このような柄鏡形住居址の在り方は、それ以前の円形を基調とする住居形態とは著しい相違をみせている。そして、中期末に至り、それまでの円形住居址から、この柄鏡形住居址へと変^{**}化している。

これに対し、同じ南関東でも千葉県を中心とする東部地域では、中期末における柄鏡形住居址の存在は希薄で、わずかに松戸市金楠台遺跡第2号住居址が知られているにすぎない(図35)。ただし、この時期の通常の住居址も、それ以前の加曾利E I・II式期に比較してやや小型となり、柱の数も伝統的な4～5本から多柱型へ変化している。また、加曾利E II式期後半まで盛行した埋甕炉が消滅し、これに代わって地床炉が盛行するようになる。さらに、それ以前にはほとんどみられなかった埋甕の埋設がわずかながら認められるようになる。^{***}以上のように、この時期に至り住居形態に若干の変化はみられるものの、あくまでそれ以前の円形を基調とする住居形態の範囲内での変化であって、柄鏡形住居址へと移行していった西部地域とは全く異なる様相を示していると言える。

ところが後期になると、それまで受容を拒み続けていたかに見えた東部地域でも、東京湾沿岸地域を中心として柄鏡形住居址がにわかに盛行するようになる。この後期における柄鏡形住居址の盛行を東部地域での内在的発展と捉えることは、中期末の住居形態からしても困難であり、西部地域からの受容とみるのが妥当であろう。

* 文献6の分類基準に従った。村田氏は主体部（住居本体）と柄部（張出部）の形状によって、I 方形短柄型、II 方形長柄型、III 円形短柄型、IV 円形長柄型に分類している。そして、西部地域ではIV 円形長柄型が主流であることを明らかにしている。

** 円形住居址から柄鏡形住居址へといっせいに変化するのか、それとも両者は共存するののかという点は、柄鏡形住居が特殊住居であるのか、あるいは一般住居であるのかという問題とも関連して重要な問題点の一つである。ここでは、「円形住居→柄鏡形住居」と変化し、基本的には共存しないとする文献10の見解に従いたい。

*** 沼沢豊『松戸市金楠台遺跡』昭49（文献12）、第2号住居址は時期、形態・構造等において西部地域のそれと近似しており、千葉県下の柄鏡形住居址としては、むしろ例外的存在である。西部地域に近いという地理的条件によるのかもしれない。なお、佐倉市江原台遺跡J 2・3・4号住居址（高田博『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書II』昭55・文献13）を柄鏡形住居址とする見解（文献10、横田正美「縄文時代中期終末期における文化様相—千葉県すすき山遺跡を中心として—」『貝塚博物館紀要8』昭57・文献14）はとらない。

**** 小川和博「千葉県における縄文中期末の居住形態」『大野政治先生古稀記念房総史論集』昭55（文献15）

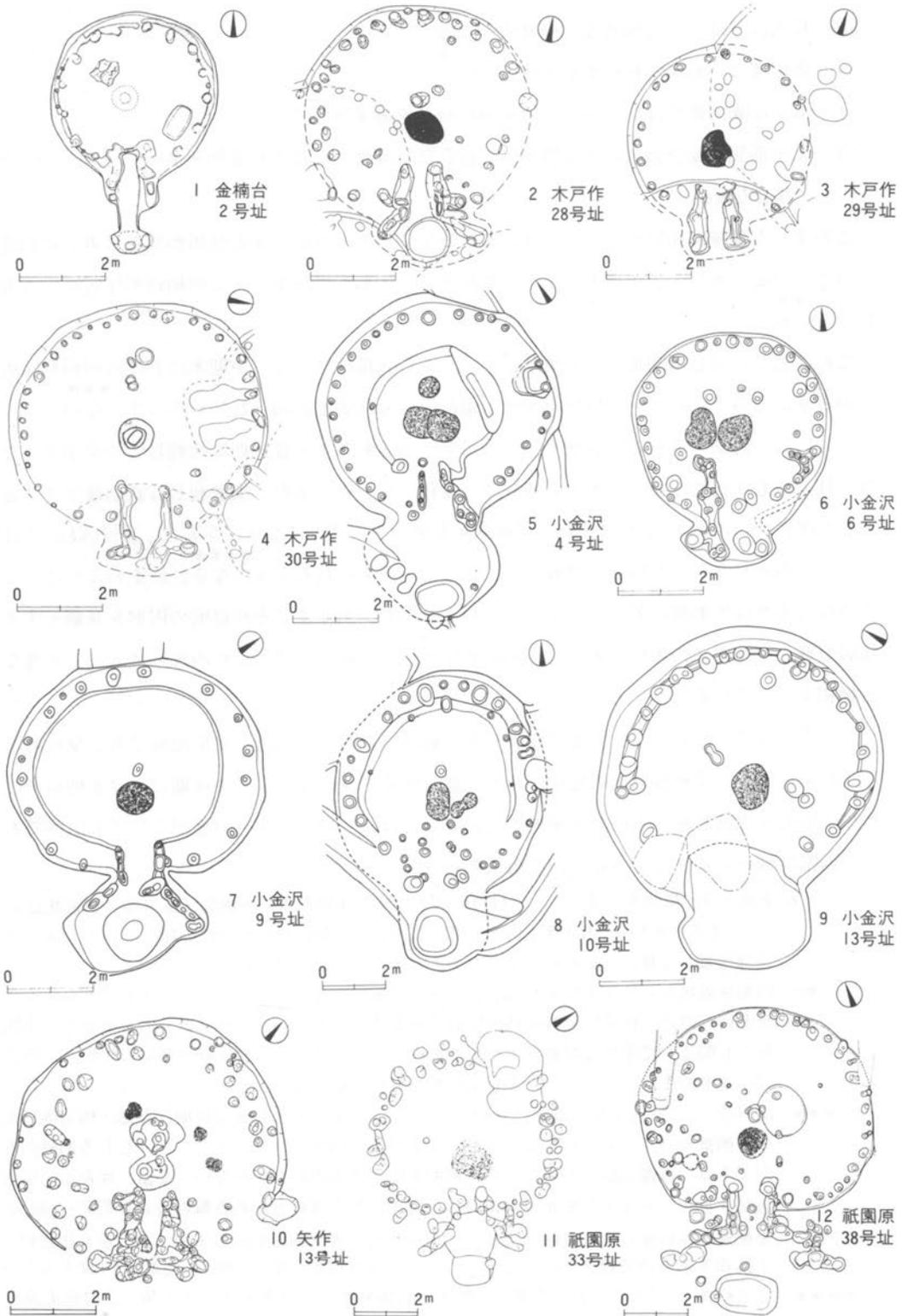


図36 千葉県における柄鏡形住居址・平面図 (各報告書より改図・転載)

東部地域における後期前半の柄鏡形住居址の形態・構造等にみられる特徴としては、おおよそ以下の諸点をあげることができる（図36）。即ち、

- (1) 住居本体は円形を基調とし、前時期に比べて大形となる。
- (2) 柱穴はほとんど例外なく壁柱穴となる。
- (3) 張出部はいわゆる短柄型を主体とする。
- (4) 敷石を施す例は皆無である。
- (5) 張出部との結合部、住居本体の壁近くに埋甕を埋設する例がある。
- (6) 張出部との結合部にハ字状に開くピット列をもつ例が多い。
- (7) 張出部の先端に大形ピットを持つものがある。

以上のような特徴を中期末の西部地域と比較すると、形態・構造等に変化を認めることができる。まず、柄鏡形住居址にとって最も特徴的な部分である張出部の形態に変化がみられる。即ち、中期末の西部地域では長柄型が主流であったのに対し、東部地域では短柄型が主流となっている。これと関連して西部地域では、住居本体と張出部との結合部に対称するような1～2本の柱穴をもつものが多いが、東部地域では、ハ字状に開くピット列へと変化している。そして、このピット列の先端、あるいはこれに挟まれるように大形のピットが存在する例も多い。曾谷貝塚E3号住居址^{*}、加曾利貝塚東傾斜面遺跡JD-18号住居址^{**}、木戸作貝塚28号址^{***}、小金沢貝塚4・9・10号址^{****}、祇園原貝塚第33・38・44・46号住居址^{*****}にみられる大形ピットは、西部地域にはみられなかった新しい要素である。

次に西部地域では、丘陵地帯を中心に敷石を施す例が多数知られているのに対し、東部地域では敷石を施す例は皆無である。これは従来から言われているように、石材に恵まれないという自然条件にその理由があるばかりではなく、敷石を施すという習俗を受容しなかったという文化的背景にその原因が求められると思われる。さらに、柄鏡形住居址を考える上で重要な要因の一つと考えられる埋甕の在り方にも変化がみられる。西部地域では張出部の先端と、張出部との結合部に埋甕を埋設するという一つの「型」^{*****}が存在する可能性がある。これに対し、

* 堀越正行『曾谷貝塚E地点』昭53（文献16）

** 後藤和民・庄司克「昭和47年度加曾利貝塚東傾斜面発掘調査概報」『貝塚博物館紀要7』昭56（文献17）

*** 郷田良一他『千葉東南部ニュータウン7——木戸作遺跡（第2次）——』昭54（文献18）

**** 郷田良一他『千葉東南部ニュータウン10——小金沢貝塚——』昭57（文献19）

***** 文献11参照。

***** 笹森健一『志久遺跡』昭51（文献20）

同「縄文時代住居址の一考察（上）・（下）——張り出し付住居址・敷石住居址について『情報2・3』昭52（文献21）

東部地域では金楠台遺跡第1号住居址、松戸市貝の花24号住居址^{*}、四街道市千代田Ⅳ区遺跡3号住居址^{**}にみられるように埋甕を張出部結合部に埋設するばかりではなく、袖ヶ浦町伊丹山遺跡006号住居址^{***}、千葉市木戸作貝塚28号住居址、同小金沢貝塚4号住居址にみられるように、住居本体の壁ぎわに埋設された例がある。なお、3例とも、張出部から見た場合、住居本体の右側に位置しており、西部地域のそれとは異なる「型」の存在をうかがわせる^{****}。

また、同じ後期前半の西部地域における柄鏡形住居址と比較しても、そこに相違を認めることができる。西部地域では後期になると遺跡数が著しく減少し、柄鏡形住居址の類例も少なく、その在り方は必ずしも明確ではない。少ない類例からあえてその特徴をあげると、

- (1) 中期末に比べて住居本体は大形となり、円形を基本とするものの、胴張の隅丸方形も出現する。
- (2) 張出部は長柄型と短柄型の両者がある。
- (3) 張出部には、ハ字状に開くピット列をもつ例がみられる。
- (4) 敷石を施す例が減少する。
- (5) 埋甕埋設例が減少する。

以上のような諸点を指摘することができる^{*****}。

こうした後期前半における西部地域の在り方と比較すると、住居本体がそれ以前に比べて大形となることや、張出部にハ字状のピット列をもつ例があるといった点で共通点を見出せるものの、西部地域のそれには張出部の大形ピットを欠くなどの点で相違がみられる^{*****}。

* 関根孝夫他『貝の花貝塚』昭48(文献22)

** 宮入和博他『千代田遺跡』昭47(文献23)

*** 三森俊彦『袖ヶ浦町伊丹山遺跡』昭54(文献24)

**** 表11の11遺跡27例中、埋甕埋設例は6遺跡6例にすぎない。しかも、この内3遺跡3例は張出部、すなわち出入口部から離れた住居本体の壁寄りに埋設されている。これは埋甕埋設例そのものが多く、しかも張出部先端、張出部結合部という出入口と強く関連する位置に埋設される例の多い西部地域とは全く異なる在り方を示している。

***** 鈴木保彦『東正院遺跡調査報告』昭47(文献25)

栗原文蔵他『岩の上・雉子山』昭48(文献26)

坂上克弘・石井寛「縄文時代後期の長方形柱穴列」『調査研究集録1』昭51(文献27)

***** 表11の11遺跡27例中、張出部に大形ピットをもつのは5遺跡10例である。この大形ピットは西部地域においてはみられないものであり、東部地域の一つの特徴と言える。その機能は不明であるが、木戸作貝塚28号址、小金沢貝塚4・9・10号址、加曾利貝塚東傾斜面遺跡J D-18住居址、祇園原貝塚38号住居址などからすると貯蔵穴の可能性もある。たとえば木製の蓋で被うなどすれば貯蔵穴が出入口にあっても不都合はないであろう。なお、金楠台遺跡第2号住居址における張出部先端の小ピットは文献10などで指摘されているように埋甕と同様の意味をもって穿たれた可能性が高く、上記の大形ピットとは性格を異にすると考えている。

iii・柄鏡形住居址盛行期の時代背景

ところで、両地域において柄鏡形住居址にみられる形態・構造等の相違にもまして重要なのは、その盛行期における時代的・地域的状況の相違である。先にも述べたように、中期末は長い縄文時代の中にあって一つの変動期と理解される。そして、その重要な根拠の一つとして、この時期における集落の継続と断絶の在り方をあげる^{*}ことができる。

すなわち中期あるいは、それ以前から継続して営まれていた集落のうち、この中期末をもって終焉を迎える集落が多数存在することや、少数ながら後期へと継続する集落も、中期末にはその規模を著しく縮小することが知られている。そして、これを補うかのように中期末から後期初頭へかけての短期間に営まれた小規模な集落が形成される。こうした集落の継続と断絶の在り方は関東地方ばかりではなく、中部・東北地方においてもほぼ同様な様相が認められることからみて、かなり広い範囲にわたる現象であったことをうかがわせる。そして、正にこうした変動期と軌を同じくして西部地域に柄鏡形住居址が盛行したわけである。ところが、東部地域ではこの変動期を同じく経験したにもかかわらず、円形を基調とする伝統的な住居形態を維持し続け、後期前半に至り、はじめて柄鏡形住居址の盛行期を迎えている。そして、このように盛行期に差があるということは、両地域が置かれていた歴史的状況にも相違のあったことを意味している。

西部地域では、この中期末の変動期を境として、後期になると遺跡数の急激な減少と集落規模の縮小に陥り、衰退の一途をたどる。そして、柄鏡形住居址が、後期にみられる衰退の前兆とも言うべき、この変動期と軌を同じくして盛行したことはすでに述べた通りである。ところが東部地域では、西部地域と同じく一時的に遺跡数の減少や集落規模の縮小がみられるものの、後期前半（堀之内式期）になると西部地域とは対照的に遺跡数の増加や集落規模の拡大がみられる。また、中期末に一時不活発となった貝塚形成も、この後期前半になると活発となり、馬蹄形あるいは環状といった大貝塚へと発展して行く。このように東部地域ではむしろ繁栄期を迎えている。そして正に、この繁栄期と軌を同じくして柄鏡形住居址が盛行したのである。

このような、柄鏡形住居址を生み出した歴史的背景の対照的な在り方は、両地域における柄鏡形住居址がもつ意味合いに相違のあることをうかがわせる。つまり、ある背景をもって発生した柄鏡形住居址は、分布を拡大していく過程で、その地域の伝統や歴史的状況によって、発生期にもっていた意味を変化させていったと思われる。そして、こうした意味の変化の具体的反映として、両地域における柄鏡形住居址の在り方の相違を理解することができる。換言すれば、意味が変化したことが歴史的状況の異なる両地域に、同じく柄鏡形住居址の盛行をみた要因であったと考えられる。

*文献10、15参照。

iv. 柄鏡形住居址発生の要因

以上のような認識に立つとすれば、柄鏡形住居址の発生と、その要因に言及せざるを得ないであろう。そこで、ひとまずは棚上げにしておいた柄鏡形住居址の発生と、その要因について述べてみたい。柄鏡形住居址の発生及び初源形態をいつ、どこに求めるか、あるいはその要因が何であったのかといった問題に対する有力な見解として山本暉久氏の一連の論考をあげることができる^{*}。山本氏は、中期後半、中部山岳地帯を中心に認められる「屋内敷石風習」の開始と、埋葬を中心とする小張出部の形成をもって初源形態とする。そして、中期末になると敷石と張出部の面的拡大によって典型的な柄鏡形住居形態の成立をみると共に、分布の中心が南関東西部地域へと移動すると言う。そして、柄鏡形住居址はあくまでも一般的な住居ではあるが「その時代背景に帰因して、極度に屋内祭事を発達させた住居であった」と規定し、そうした柄鏡形住居址発生の背景には「それまで増加しつづけていた人間集団を支えるにたる生産力が維持できなくなったことが考えられ、同時に生産力の限界はきびしい自然環境にも大きく規定されていたと想定される」という見解を示した。こうした見解は、柄鏡形住居址を縄文時代の歴史過程の中に位置づけ、その歴史的意義を明らかにしようとした点で高く評価される。

こうした見解に立つと、繁栄期に柄鏡形住居址の盛行をみた東部地域の状況をうまく説明することができないことに気付く。しかし、これは山本氏の見解が誤りであることを意味しない。なぜならば、すでに述べたように、東部地域における柄鏡形住居址盛行の歴史的背景は西部地域の背景とは相違しており、従って、東部地域での柄鏡形住居址の意味も変質していったと考えられるからである。

山本氏も述べているように、中期の変動期は気候の寒冷化を一つの引金として発生したと考えられる^{**}。基本的には狩猟採集経済の段階に留まっていた縄文時代社会にとって、気候の寒冷化は大きな打撃であったにちがいない。それは拡大しつづけていた集落の維持を困難にし、集落を分散せざるを得ない状況に陥らせていったものと思われる。この集落分散こそ、中期末における集落の継続と断絶の在り方にみる変動期と理解することができる。集落を分散させることにより、壊滅的打撃を被る危険の分散を意図したものと考えられる。また、この危機を回避する一つ的手段として社会全体の祭祀性を強めていったことの具体的な現われの一つが、敷石や埋葬といった祭祀性の強い施設を重要な要素とする柄鏡形住居址の出現であったと理解することができる。

しかし、東部地域では同じように変動期を経験しながらも、相対的に高い海への依存によって、生産活動の多様性を確保し、西部地域に比較して、その打撃を相対的に小さなものとする

* 文献 9、10 参照。

** 安田喜憲「気候変動」『縄文文化の研究 1』昭 57 (文献 28)

ことができた。また、このような地域的狀況は、西部地域のように祭祀性の強化へとつながらなかったと考えられる。東部地域において、中期末に祭祀性の濃厚な柄鏡形住居址が受容されなかった背景として、以上のような要因をあげることができる。

そして、変動期後の後期前半に至り、貝塚の盛んな形成などに見られるように、海への積極的な進出によって繁栄期を迎え、柄鏡形住居址を受容したときには、その祭祀性は希薄となり、単に一つの住居形態として受容されたと考えられる。こうした受容の在り方が、敷石の欠落、埋襲埋設の希少さや、その位置が出入口部から外れるといった相違点をもたらしたものと理解される。

v. おわりに

従来、その存在が希薄とされていた東部地域の柄鏡形住居址の在り方について、西部地域におけるそれとの比較検討を中心に若干の考察を試みた。両地域では、柄鏡形住居址の形態・構造等に相違点をもつと共に、盛行した時期に差がみられる。西部地域では、後期以降顕著となる衰退の前兆とも言うべき変動期と軌を同じくして盛行したのに対し、千葉県を中心とする東部地域では、むしろ大貝塚の形成に象徴される繁栄期に盛行している。このように時代背景の異なる両地域に同じく柄鏡形住居址が盛行した背景には、西部地域から東部地域への受容過程でその意味が大きく変質したことによると考えられる。そして、この変質とは、すなわち祭祀性の欠落であったと理解したい^{*}。

本稿を書くにあたり、米田耕之助氏、小川和博氏に種々の御教示を得た。また、鷹野光行氏、近藤敏氏には文献収集で御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。

* その他の参考文献（表11に引用）

杉原莊介・戸沢充則「貝塚文化」『市川市史第1巻 原始・古代』昭46（文献29）

清藤一順『千葉市矢作貝塚』昭56（文献30）